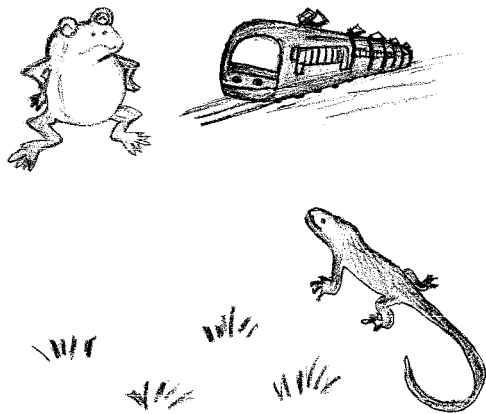


みんなの童話

とかげのトー君



ぼくは、とっきゅうのように走るのが速いし、とくべつきれいな色のからだをしているから、みんながトー君ってよぶんだよ。駅前の坂をのぼった丘の上に住んでいるんだよ。

ぼくの楽しみは、友だちとかけまわってあそぶこと。

もう一つは、この丘の上から毎日電車のおるのを見ること。

白いとっきゅう、赤いパノラマカー、青と白のミユースカイ。

風のにってきこえる、ガタンゴトン、ガタンゴトンのリズム。

ダダッダダッ、ダダッの力づよい音、ぼくはそれがだいすきなんだ。

そっだ、今日こそあの電車にのってみよう。そうきめると、駅へむかう下り坂をわき目もふらず走った、走った。

「おい、トー君どこへ行くの？」

「からすのおばさんの声。」

「駅だよ、えーき」

ぼくは、大声でいった。

大ぼうけんをするんだと思うとからだも心もあつくなっていた。

きんちようもしていた。

駅の改札口をすりぬけ、ホームに上がった。人に気づかれないようにベンチの下にもぐった。

「ゴーと電車がはいってきた。」

わあ、でっかいなあー、丘の上から見ていたのとはおちがいがい。

「おお、すごい！」

ぼくは目をまんまるにした。

一番前の車両のドアがひらくとぼくはおもいきって、するりとのった。

「ピー、ピー。発車のふえがなり、ドアがしまった。」

ガタンゴトン、ダダッダ、電車の音はからだまでひびいた。

ぼくが首を上にもつけたとたん、車しようさんと目があった。とっさにぼくは、

「のってもいいですか？」

少しふるえる声できいた。車しようさんは、腰をかがめて

「あ、いいよ。前のほうがよく見えるよ」

「え、いいんですか？」

ぼくはもう一度いった。ほんとうなら、おい出されるんじゃないかと、どきどきしていたので、とび上がるぐらいうれしかった。そして運転席のうしろのガラスまどにピタッとからだをつけた。

目の前につづく線路、家も木も田んぼもうしろにとんでいく。

「はい、はい、ぼくがどんなに走っても、かないっこないなと思った。」

「ゴーと音がして、まわりのけしきがきえた。あ、トンネルだ。」

つぎのしゅんかん、ぱあーと明るい光がぼくの目に入った。そのとたん、くらくらと力がぬけて、乗客のいる席の前におちた。

「あつ、とかげだよ」

「なんてきれいなとかげなんだ」

「ほんとに、ダンスしているよ」

と、いう声がかすかにきこえた。

ぼくはダンスをしているのではなく、目がまわったのに。

ドアがあき、きもちのいい風、駅だ、ぼくはいそいでおりた。

電車はつぎの駅にむかって発車した。

「トー君、トー君」

「え、ぼくのことよんだ？」

「ふりむくと、かえる君がいた。」

「ねえ君、トー君だろう。電車にのってきたのかい、勇氣あるね」

「そっだよ、でもどうしてぼくの名前を知っているの？」

「君の名前は、ぼくたちかえるなかまのあいだでも有名だよ。光にあたると、青、黄、みどり、オレンジ色にかがやいて、美しいね」

「ありがと、かえる君も電車がすきな？」

「うん、ここにきて電車を見るのが、なによりの楽しみでね」

「そつ、ぼくとおなじだね」

「トー君のところと、ぼくのところは線路でつながってるんだよ、また会おうね」

ぼくは、こくんとうなずいた。

いい友だちに出会えて、ほんとうにうれしかった。

「気をつけてね」

かえる君はいつまでも手をふっていた。

丘の上に無事もどったぼくは、電車にのったことをなかに話した。

でもね、あの電車の中で目をまわしたのだけは、ないしょ。

しろやま会員 やの かつこ